

平成23年度購入文化財一覧

【奈良国立博物館】(計4件)

<p>1</p>	<p>○種 別 ○名 称 ○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><絵画> 紙本墨画渡唐天神像 (しほんぼくがととうてんじんぞう) 一幅 江戸時代 17世紀 紙本墨画 掛幅装 縦 108.3 cm 横 45.9 cm 頭部を「天」、体部を「神」の草書体で表し、文字絵の体裁をなす渡唐天神像で、本図上方には天神を題材とする和歌が記されている。筆者の近衛信尹は寛永の三筆に数えられ、江戸時代末の画人伝『古画備考』によると墨画の渡唐天神像を百幅遺したという。実際、本図とほぼ同一の天神像が各地の天神社を中心に十数幅伝存しており、これらの作例と本図を比較検討すると信尹筆の一幅と考えられる。本図の附属品から、勝海舟(1823~99)寄贈という本品を明治18年(1885)に松浦武四郎(1818~88)が求め、同26年(1893)には古筆宗家12代了悦(1831~94)が極を付しており、近代以降の伝来が比較的明らかである。 5,000,000円</p>	
<p>2</p>	<p>○種 別 ○名 称 ○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><書跡> 紙本墨書万昆嶋主解(紙背 写千卷経所食物用帳断簡) (しほんぼくしよまこんのしまぬしげ(しはい しゃせんかんきょうしよしよくもつようちょうだんかん)) 一枚 奈良時代 天平宝字2年(758) 紙本墨書 未装丁 縦 28.9 cm 横 24.7 cm 本品は正倉院宝庫から流出した古文書の一つで、戦後長らく所在不明であった。一次利用面である「万昆嶋主解」は、写経所の経師であった万昆嶋主が重病の姑(父親の姉妹か)を看病するために4日間の休暇取得を申請したものである。当文書の事務処理が完了し不要になったのちは、その紙背が写経で、日々の食物の利用状況を記録する「写千卷経所食物用帳」の用紙として再利用された。この文書は当時を生きた人々の生活の一端を窺い知ることができる貴重な歴史資料といえる。 36,750,000円</p>	

3	<p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p>	<p><書跡> 紙本墨書足利義満書状案 (しほんぼくしよあしかがよしみつしよじょうあん)</p> <p>一幅 南北朝時代 14世紀 紙本墨書 掛幅装紙 縦 119.5 cm 横 59.8 cm</p> <p>本品は室町幕府3代将軍・足利義満(1358~1408)が康暦2年(1380)8月26日に関白二条師嗣(1356~1400)に宛てて送ったと考えられる書状の案文で、義満が興福寺僧の円守を当寺別当に補任するよう推挙したという内容をもつものである。円守は東院僧正と呼ばれ、朝廷や将軍家の仏事にたびたび招請されているほか、応安5年(1372)の強訴の際には解決のために上洛し朝廷側と話し合いを行っている。当文書冒頭の注記と本文が同筆に見えることから、本品は興福寺東院などで作成された案文である可能性が高い。室町幕府が興福寺人事に干渉していたことが明確な史料であり、中世南都と室町幕府の関係を知る上で貴重な歴史資料である。</p> <p>8,000,000円</p>	
4	<p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p>	<p><彫刻> 木造阿弥陀如来坐像 (もくぞうあみだによらいざろう)</p> <p>1 軀 平安時代 9~10世紀 カヤ材 一木造 内刳なし 古色 彫眼</p> <p>像高 35.9 cm 髪際高 29.4 cm 頂一顎 14.7 cm 面長 8.0 cm 面奥 11.8 cm 耳張 11.1 cm 胸奥(左) 10.8 cm 胸奥(右) 10.9 cm 腹奥 13.1 cm 臂張 20.9 cm 坐奥 17.8 cm 膝張 26.9 cm 膝高(左) 5.9 cm 膝高(右) 5.5 cm 足先開(外) 5.0 cm 足先開(内) 2.3 cm 台座高 18.4 cm 台座框幅 21.8 cm 台座框奥行 17.1 cm 光背高 36.7 cm 光背幅 19.0 cm</p> <p>腹前で右手を上にも両掌を重ね阿弥陀の定印を結び、左脚を外にして跏趺坐する像である。四肢のバランスを顧慮せず、カヤ材を用い、全体を一個のマスの中に把握するような造形、晦渋味のある微笑を浮かべた迫力ある表情に、平安時代前期彫刻の特徴が示されている。定印の阿弥陀如来像は、京都・仁和寺阿弥陀三尊像の中尊(仁和4年・888)を初例として、同・清凉寺阿弥陀三尊像の中尊(寛平8年・896)が続くが、本像はこの二像に匹敵する古例といえる。しかし、定印を結ぶ手の立てた両第二指の背が接することなくわずかに隙間(約3ミリ)がある点は珍しく今後の検討を要するが、定印阿弥陀像初期の一作例として注目に値する作品である。</p> <p>52,500,000円</p>	